
スティーラー・ボール・藍

ピュゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ステイール・ボール・藍

【Nコード】

N0494U

【作者名】

ピュゼロ

【あらすじ】

「罪には、罰を。咎には、報いを」

「弁えております」

「積み上げた悪行には、相応しい痛みを」

「存じ上げております」

「貴方が何を思うとも何も変えられはしない。凝り固まった涙には、然る可き行いを」

「ええ、そうですとも」

「顔を上げなさい。そう、貴方は少し 悲しすぎる」

(前書き)

「渡し繋いで命の劫火ほのお。阿呆が踊り死んでも笑うその影に、罪の誘惑もいを抱えまする」

「オノレの腕を切り落とすのは、底と底を這い蹲る愚図めに御座います。嗚呼、ああ、ただただお嗤わらい下さいまし」

「くるりと揺れて、さっさと腐る。飽く迄陳腐な悲恋劇、叫んだその目に妬き付けて差し上げましょうね」

「泣き虫と痛罵するならば、是非とも御立ちを歓声を。孕ませし胤たねに稚児可愛こゝろや、それとも出来損ないゆえでしょうか」

「さあさ籠を御担ぎ一兔に馳せ参じましょうぞ。死に急ぐ？ 皮を剥がれても知りませんよ」

「眩しき説法掲げられ、如何どうして穢じい我が身を晒せるものでしょうか。成りません御座いません、私じゃありませんとも」

今宵語られるは虚構の挑戦レース。

全てに意味があり、未来みらいがない一巡ひとまわりした因果。

要らないものを捨てた先に見える意味と呪い。迫る過去と消える未来を掴もうとして、逆に攫さらわれないよう ご注意下さいね。

『全て』がある以上『それ以外』が存在するもまた必然、知る必要は欠片も御座いませぬけれど。

現世の夢の飛沫、残滓。全てを語ろうとしても、それすらもまた一夜の露となる。

貴方の意志は、果たして揺るがないものでしょうか？

地底には、忌まわしい妖怪たちが縛り付けられているせいかもしれない。

地上は、太陽を見上げながら暮らしてきたせいかもしれない。

ともかく 地獄の改革や鬼の大移動と時期は前後するが、ある期を境に上と下とはある約束によって往来が制限され、結果地底は閉鎖的な空間の中で独自に社会を構築する。

とりわけ……怨霊。

地底でも特別念入りに輪を掛け鎖を掛けて封じるはずのそれが、何の因果か間欠泉と共に地上に吹き零れてしまったあの異変。

少なくとも、あの子にそんな気があったとは思えないんだけど……。

あの日から、失われた交流が黄泉返った『かもしれない』。誰も、口に出してそうとは言わない。

ただ あの、奇妙な巫女が呪わしい地上を撃ち抜いて、そこから新たな風が吹いた。何世紀も感じることもなかった空つ風に、これまでになかった新たな何かを感じた者は、ただ沈黙した。目を細め、とりあえず様子を見守るような方針で。

だがそれを言ってもこの状況では到底受け入れられそうにない。そこで彼女は責める方向を変えてみた。

「それにアンタら、寄ってたかって女の家漁るなんて！」

「警告は、一週間前からして……」

「査定の期日は向こうから指定してきていたわけなんです、ええ」

「あつ？ そ、そうなのかい？」

「大体なあ」

「目下、それが逃げだしているんです……」

ひよんな事から宴会に誘ったのがきつかけだった。

最初は、目に付いたついでに強引に引っ張っていった。単に酒の前で、無粋な顔に出会ってしまったのが、気に食わなかっただけだった。

妬ましいだとか何とかぶつぶつと言っていたが、独特の沸き立つような雰囲気になれていないのか耳を軽く上気させているのを見て案外可愛いところもあるんじゃないかと思ひ直し、酒を勧めるとその初々しい反応がまた気に入る。個人的に、耳でも角でも何でもどっか尖っているのが特によろしい。

二度三度と誘う内に、時たま宴会以外でも会うようになっていた。とはいっても、旧都何かで偶然出会えば茶屋に入って話すような程度の、そんな関係だったが。

でもそんな距離感が好きだった。橋姫だろうが何だろうが、一緒に飲んでみれば面白い奴で。やはり酒は偉大だ。

長くつるんでいれば、意外と激情家な面や犬を好かないところ、好みの酒、色々と見えてくる。

友人、で括るには少し物足りなくて。

さりとて親友、というのも何だか照れくさい。

『はあ？ アンタ鬼なんだから、適当に決めちゃいなさいよ』

本人にそう言われたらもうどうしようもないが、勇儀は結局私は鬼で、あいつは橋姫である、という結論に思考を落ち着けた。

そうとも。鬼なのだから、うだうだと考え込むのは性に合わない。適当な名も見つからないのなら、それはそれでいいだろうさ、と最近は思っていたのだった。

とにもかくにも、大切な奴。

だったら私は一体、どうしたらいいのだろうか？

瞳孔に差す色が暗くなる。ぼんやりと、目の前の妖怪らが意味のわからない言葉を喚き散らすのを見つめた。

無性に、事の発端であるパルスィに会いたくなつた。

「そもそもここまでの経緯は最早どうでもいい事 問題は上と下の番人である『水橋』のが地上に内通していた事だ！」

「盟約違反だっ」

「……………そりゃあ……………」

勇儀は言葉につまる。

元来、鬼は口が回るようにはできていない。話し合うにしてもまずは景気づけに一発、と殴りあい洒落込む種族なのだ。

言葉を探すように、卓に置かれた品々に目をやった。

そもそも、彼女自身これらの品々には疑問を抱かざるを得ない。

それこそ、いの一番に見つけたのが自分であつたならば取る物も取り敢えず話を聞きに行くだろう 「これは何だ？」と。

数多の妖怪がこつも敵視し盲目的に熱くなる理由……………一番最後に運ばれたのは、妖怪たちの視線を煌々と照り返す、“博麗の陰陽玉” だった。

(こつなつちまつた以上、あの偉そうな連中が上手い事やってくれてるんだと信じるしかないか……………)

昔から、困つた時には額の角に触る癖。

苦々しい思いを残つた酒と共に飲み下すと、後にはなんともいえないわだかまりだけが残つたのだった。

ウオオオオオオオ……………！！

旧都の郊外にて、異様な熱気に包まれた集団が土埃を巻き上げていく。

囲われた地底では自ずと空間は横に広がる。轟くような喧騒はしだいにうねりとなって、岩壁の隙間に反響が重なる。自然、行くべき場所なんて上にしか、ない。

壮絶な逃避行を繰り返していたのは、奇妙な塊だった。

何しろ、目で捉え辛い。決してその速度が、という意味ではなく、突如“ふっ”と掻き消えたかのように見えたら、いつの間にか見当違いな方向に追っ手らが向かっているのだ。おまけに地中から抜き出た岩に身を隠しながら逃げるため、弾幕がうまく放てない。

追っ手が集団でなければ、とつぐに見失っていただろう。

今もまた、撃たれた光弾が直前で回避され、岩肌を抉り取った。

逃げる二人組みも格別走るのが速いとかいう事はなく、反撃のきっかけも掴めないまま逃げているだけだった。

だんだん、だんだん、二人組みの速度が落ちていく。それに追っ手らは追いつけるといふ希望の光を見出して、一際力強く駆け出した。

彼らの中に、その二人の背を凝視する余裕はない。

『掟にそむいた者には罰だッ!!』

徐々に、ゆるやかに、思考がその一色で塗り潰されていく事を自覚する者は、いない。

必死の形相で獲物を追い立てる彼らを見て、果たして何人がそのままに“追い立てている”と感じるだろうか。

追い立てられている彼らはもちろん、知りえない。嘘の色。

橋姫はあんなに、抜けるような薄い金髪だったろうか。いくら辺境とはいえ、辺りはこんなに薄暗かっただろうか。

今、陽炎のように背中が揺れ動いたような、

そして、頭から地面につんのめる音。

一人が集団から脱落した。残りは気づかないで走り去ってしまおう。しばらく、自分がどうしたのかもわからないように弱々しく呻いて手足をよじり、激しく咳き込んだ。限界を打ち鳴らす心臓が激痛を叫び、酸欠気味の脳はただぼんやりと彼女を見つめた。

涙零す瞳も持たない、彼女。

紙のようなものがびりびりと破れる音を聞きながら、彼女の第三の目が何故閉ざされているかすらも、わからないままだった。

「あ……頭、痛い……」

その嫌われ者のパルスィは目下のところ、突然降ってわいた災厄に頭を抱えていた。

秋に重く穂を垂らす稲のような、生命を象徴する黄金色^{こがね}。その緩く波打つ髪からはやや尖った耳朶が突き出していて、自身の厄介な状況を嘆くように時折ピクツと動くのだった。

緑色^{グリーン}の目をした見えな^{・アイト・モ}い怪物として、忌み嫌われてきた地底の妖怪たちの中でも結構うまくやってきたつもりだった。最近になって妬ましい連中が降りてくるようになるにもなったが、橋守として別に不満もなかったしへまをしたつもりもなかったのに。

「どうしてこんな事に……」

「独りになって初めて全てを得る。でも、今回は災難だったわねー、パルスィってば」

呻くようなパルスィの言葉に答えたのは、トレードマークとなっている鰐広な帽子をピンと伸ばした指で斜めに浮かせている古明地こいしだった。

「ちよろつと見てきたけど、もうしばらくは戻れそうにないわね。殺気立った連中が大勢いたわよ」

「うえ……」

灰桜の髪と、閉じた第三の瞳。何よりそのガラスのように質感のない群青の双眸が、二人との付き合いの長いパルスィにさえふとした瞬間姉妹とは思えなくなってしまうようで。

だが、数刻前にふらつと現れた彼女のおかげで、何とか追っ手が来る前に旧都から数里は離れた岩峰が連なるここ（針山地獄候補地だったが、スリム化政策を経て手付かずとなっている。なお現在のところ再建の予定はない）まで逃げ果せられたのだ。さらに、現在孤立無援なパルスィにとって貴重な協力者でもある。

ああ、どうしてこんな……。再度パルスィが嘆息する。

「私が何したつてのよ……」

「んー、これじゃない？」

そう言つてこいしが意識できない一瞬の所作で取り出したのは、黒と白の太極曲玉。

目下、幻想郷最高峰の“謂れ”が集うと認識意識示唆されている、博麗神社最大の秘宝だった。

「いろいろ荒らされてたけど、一番重要そうに運んでたから一目を気にせず持つてきたわ……って、よく見たらこれ霊夢のね？」

ああ、そっか、だからか」

「荒らされてたのかよ……」

終わった、社会的に終わったわこれ……と言つてパルスィはまた自分の世界に引きこもってしまう。こいしの疑問に答える余裕もなかった。

それを見たこいしは、手に持った玉としゃがみ込んだパルスィの後頭部とを何度か見やり、言葉を探すように少しの間逡巡していたが、

「お姉ちゃんも手は尽くすけど、できればほとぼりがさめるまでは隠れていて欲しいって。あ、あと会いたいも言っていたわ」

「そ、そう……」

パルスィが引き攣った声しか返せないのは、そのお姉ちゃんが再

開いた途端に肋骨が軋むほど抱きしめてくるであろうと、これまでの経験からありありと想像できたからだ。

「いや、心配してくれてるのはわかるんだけどね……」

「そう言っていただけですと、うちのさとりも喜びますわ」
澄ました顔でこいしがのたまう。

「逆に、さ。パルスイは嬉しいわけなの？」

「……そりゃあ、まあ……」

上半身を倒して覗き込んでくるこいしに、頬をやや上気させたパルスイはぼそぼそと返す。目を逸らした。

「なるほどなるほど……」

ありもしない髭を撫で付けるように顎をさするこいしがほう……と意味深に微笑むが、それはとりあえず後回しにして、と手の中の陰陽玉に目を落とした。

「何でこれがパルスイの家にあつたわけ？」

「……だつてさ、あれ以来霊夢とかが家に顔出すようになったんだもの。酒飲むぞー、とか言つて……ああ、あの無神経さが妬ましいわ」

言つわりに、彼女からは喜悦の色が見える。

「最後に……そう、ついこの間、泊まつてつたわね」

「そこで忘れたのか」

しげしげと陰陽玉を覗きながらこいしが言う。

そのまま握る手に“ぎぎぎぎ”と力を込め始めた。

「……駄目だわ、これ。割れやしねーわね」

「割ろうとしたの!？」

出し抜けに響いたパルスイの声が、一帯にむなしく木霊する。

……はあ、と二人のどちらかが溜め息を吐いた。

「まあ、それはそれ」

これはこれと、こいしが取り成して、それからゆっくりと呟いた。

「それで　　これから、どうするの?」

「……どうするもこうするも……」

私に一体どうしろというのか。

さとりが隠れていて欲しいと言つのなら、つまりは私は匿えないという事だろう。具体的な未来未来が想像できないパルスイには、最悪彼女に事情を話して何とかしてもらおうとしていたのだが、それが駄目だという。

まさに寝耳に水だった。普段どおりに、橋守に励んで行き交う者に嫉妬の籠った視線を浴びせてようとしていただけなのに、どうしてこんな……事に。

「……どうして」

こいしに先導され、とりあえずここまで辿り着いたはために、彼女はまだ追っ手をその目で見てはいない。

否、たとえ見ていようが……同じ事だったろう。

理不尽、その一言に尽きる。刹那的な後先は考えられても、未来に続かない。実感が湧かないからだ。

どうして、こんな。

「……ううう」

くしゃり、と自分の顔が歪んだ。嗚咽が込み上げてきて、堪えようと深く吸った息が思うように吐き出せない。

膝について、一筋の涙を頬に感じたら、後はただ壊れるように声を上げて泣いた。

悲しいのか、それとも悔しいのかすらわからずにただパルスイは泣いた。

いつその事壊れてしまいたかった……の、だろうか。否定するだけの勇氣も心構えも皆無に近い。何も無い。

何が起こっているのかも、わからない。

そこに。

ふわり。

頭を抱き抱えられる。その感触と、伝わるぬくもり。

「パルスイ」

こいしの声でした。

「……あ」

「大丈夫。大丈夫だから……」

あの、彼女が。

路傍の小石。何も考えていない者。

うまく 頭が働かない。私は、彼女に、温かい………？

無意識だろうか、両の腕が彼女の背中を掴んだ。そのまま、おずおずと抱きしめる。

しばらく、二人とも無言だった。貪るように ではなく、確かめ合うように でもなく、ただお互いの熱を感じて。

声を忘れてしまったように、パルスィが腕に力を入れる。

恨みの代わりに、何か柔らかいものがパルスィを満たした。

「……………」

どうい風風の吹き回しか。孤独を享受している彼女に慰められるなんて。

幾分落ち着いたのか。

足を伸ばして、こいしにもたれるように抱き抱えられる。頭を抱きしめられているのだから、こいしの顔は見えない。

彼女の顔のすぐ下には、閉じた恋の瞳があった。

ふと。指を、それに伸ばした。けれど、触れるか触れないかぐらいのところまで止められる。だめー、お姉ちゃんでも、触っちゃだめなんだから、とこいしが言った。

つまらないと思い、せめてとばかりに第三の瞳に繋がる管の方をつまんでみたが、特に何も無い。脈打つのかな、と少し考えたが、かすかに温かいだけだった。

「その様子だと、もう心配いらなみたいね」

「うん、まあ なんか、ありがとうね」

慰められるような口調。割りあい素直に受け入れられたのは、やっぱり気持ちに若干でも余裕ができたからか。

繋がっていた手を離して身を引くと、途端に気恥ずかしくなる（抱きついて いや、抱きしめられたのか）。

ついていた膝を払いながら、意識して顔を見せない彼女に、こいしと言った。

「考えていたんだけどね、パルスィ」

手の中には、一枚の紙がある。天狗発行の新聞、その一面にはでかでかと文字が踊っていた。

「これ、地上の新聞なんだけどね　そこから読める？」 『ステ

イル・ボール・ラン』レースが開催されるんだって」

「……え、ええと」

「ほらほら、ここ見て、ここ」

こいしが指差した欄にはレースの優勝特典について記載されている。覗いたパルスィの顔色がみるみる変わっていった。

「こっ、これって……」

「信用できるかって？　大丈夫じゃないかな　だってほら、こっちに」

「ちょ、主催　八雲紫い？」

「　　ね？」

極々僅か、微々たる単語の羅列が彼女を激しく蠢惑する。パルスィの中で期待と理性がせめぎあった。

突拍子も無いが　何といても、“あの”八雲紫なのだから…

…！

「で、でも……優勝すれば、でしょう？」

「まあ、優勝は積極的に狙っていくべきでしょうけど。少なくとも、長期間開催されるんだから身をくらすにはうってつけじゃない？」

「そりゃあ……そうだけど……」

旨い話には裏があって当然。なおかつこれは妖怪の賢者八雲紫その人なのだ。

なのだ、が……。

「　　やるしかない、のかな」

今の自分の立ち位置は尋常ではなかった。追っ手に捕まったらなどとは言いが、そもそも誰に追われているのかわからない。

理由も検討がつかない。鬼が誰だかわからないのに人ごみの中で鬼ごっこをやるようなものなのだ。危険を鑑みても、優勝して

丑の刻参りは得意よ、とパルスィが言った。

「いや、それは違うけど」

自分が持つていないもの、他人が持つているもの。それが優れていたら、なおさら恠気りんきが搔きたてられる。

平穩という手垢に塗れた宝石。

「身元ぐらいは保証してくれるでしょうし。これで駄目だったらもうどうしようもないわ」

パルスィがどこか吹っ切れたような顔をする。

「あつでも待つて考えてみたらやつぱり理不尽よこ」

こいしが手の新聞紙を「ビリビリビリイッ」と縦に裂いた。

その左右に絶たれた紙の境界をなぞるように、虚空に黒い線が現れる。

「便利ね、地上の新聞つて」

あつという間に形を成した、一人妖怪一人は軽く通れそうな隙間に向かってこいしが呟く。

「えっ？　ねえこいし、これ」

「だから身元の保証だつてさ」

ほらほらと言いながらパルスィの背中を押す。何となくそれを不審に思う彼女の足がそれに到達すると「うひいっ」と情けない声をもらした。

「何か変な感覚がする！　ねえこれでいいの？　本当にこれで……」

ええい押すな！

「優勝頑張つてね、私も後からお姉ちゃんと応援に行くから！」

「聞きなさい！」

叫ぶ彼女の声がかぐくもつて聞こえた。隙間に踏み込んでいる両足が頭一つ分ほど低くなっていて、振り向き何かを言いかけた口が無音映画イキのようにただぱくぱくと開閉する。

次の瞬間には、全身等しく隙間の中へのめりこんでいった。

「……………」
パルスィの体を呑み込んだ裂け目が、ゆっくりと閉じていく。比
例してこいしの表情も苦虫を噛み潰したように顰しかめられていった。

見届けた彼女はそのまま言葉なく、懐から一枚の符を取り出した。
めんどくさそうに中心を指でなぞり、耳と口元にかかるように当て
た。

「もしもし」

「はい、はい、はい、わかってるわよ。特別な扱いで。とう
とうあの子もレースに参加するのねえ、感慨深いわ」

申し訳なきで一杯だからなんだけど、ね。

どういう原理か、符から声がする。軽薄さを水で希釈したような
その音は、こいしの耳朵に響く。

「大丈夫かしら　大丈夫よね？」

「さあ」

吐き捨てるようにこいしが言った。

「一つ確認があるんだけど」

「あら。何かしらね」

目の錯覚か　ほんの一瞬、彼女の第三の瞳が柔らかくなった。

「私たちは単なる利害の一致で手を組んでいるに過ぎない。お互い
に手元だけを見つめていればいい　そうだったはずでしょう？」

「……ええ、そうね」

「重畳。それでいいのよ」

「無理かしら？」

「厭いやよ」

それに、とこいしが、声に意趣のような力を込めた。

「大丈夫何でしょう？」
バリバリと音を立てて符が握り潰された。生に倦んだように、塵のごとく細かく碎けてすぐに霧散した。

死んで欲しいとは思っても。

殺したいとは思いません。
口が裂けても。

「……あらあら」

頬杖を突くように、人差し指と中指を揃えて己の右耳に当てていた八雲紫が言った。座る椅子の肘掛けに置いた腕はそのままに、視線を同室する二名へと向けた。

ガラス張りの窓際に注ぐ光を横顔で遮る彼女の上方では、締め切っているにも関わらず窓掛けがゆらゆらと揺れている。

「寂しいわね。お友達になれると思ってたのに」
語る表情は確かに憂いを含んでいるようにも見えるが、それ以上に胡散臭い微笑を浮かべているのだから始末が悪い。胸中を、容易には覗かせない。

「だから言ったでしょう。あの子は椅子を共にする資格はあれど、抱いている理由が私たちとは根本的に異なっているのだから」

返ってきたのは、どこか棘のある言葉だった。

マリオネット

ギリギリ、ギリギリと、人間の子供ほどの大きさの糸繰り人形が精巧な顔を紫に向ける。手元で二本の棒針が人間もかくやというしつかりした手付きでマフラーを編み上げていき、その体から伸びる無数の糸は十字の操作盤へ、そしてそれを繰るアリス・マーガトロイドへと続いていった。

「別にこのままでいいじゃない。私たちはあの子を利用させてもらっているし、あの子も私たちを使って自分の目的を成し遂げる。そうそう変わるとは思えないわ。それこそ、奇跡でも起こらない限りは、ね。」

語尾などに少々怪しい部分はあるものの、よくよく聞かないとその声が人形だとすぐさま気づく事はできないだろう。

アリスが、その白い指先で代わりに喋らせているのだった。

流暢に話す人形に対し、当の本人は目を閉じたまま紫が掛ける椅子と同じものに埋もれるようにしている。その容姿と相俟って、一体どちらが人形なのだろうか、見る者を錯覚させた。

「そう……なのかもね」

悲しい子、と紫が呟いた。

「アリスさん、今奇跡と言いませんでした？」

そして、もう一人。

喜悦が見え隠れする言葉は、同じくアリスの人形である上海とチエスに興じていた東風谷早苗のものだった。

窓に対して背を向けて座るアリス、紫らから少し離れた位置のテーブルに着き、白のナイトを摘んだまま振り返って言った。

「奇跡と言われてしまったら黙ってられないのが現人神、この私なので」

「シャンハイ」

「あ、ごめんなさい」

魂が宿る半自立人形に叱咤され、早苗が駒を盤に戻した。全体的に、押され気味だ。

上海はテーブルに手を伸ばすには上背が足りないため、椅子に分厚い本を置きその上に立っている。少し悩む仕草を見せ、黒いポーンを一マス進めた。

「……詰んでるわね」

流し目で見た紫は、二人の対局を上海に軍配が上がると断言した。

「でもまあ、このままいけば、ね。二人とも頑張つて頂戴」

「う、嘘……私、上海ちゃんに負けるの……？」

「シャ、シャンハイ……」

翡翠色の髪をした現人神がそう打ちひしがれると、困ったような声を出して上海人形が首を傾げた。

三者三様のありかたで、その時を待ち続けていた。

奇妙だった。

奇妙な花だった。歩く者の足音を完璧に包み込めそうならいに分厚いカーペットから、シックな模様が彫られた机の脚が伸びている。その上の置時計の隣に置かれたその花は、秒針が「カチツカチツ」と刻んでいくたび微妙に花卉の色合いを変えていくのだった。

今は、透き通るような紫色。

「入ります」

コンコンとノックが室内に響き、八雲藍が返事も待たず扉を開けた。

藍が後ろでに閉めるそのボタンという音に、これまで反応らしい反応をしてこなかったアリスが、か細い顔かんほせを上げた。

上海を膝の上に抱いた早苗も、ニコニコと邪気のない笑みを向ける。

二人を視界に入れつつ、藍は己が主人に向かって、

「苦情が出始めています、紫様」

九つの尾が揺れた。

「現在までに待機している参加者に対し、空間を繋げて提供していたトイレの数が圧倒的に足りません。そろそろ限界があります」

空虚に、紫は椅子にもたれたまま、窓の外を眺めていた。

さらに、藍は続ける。

「宿泊場所も足りません。用意していた施設は全て埋まっており、すぐにでもまた新たにお創りになっていただかなくてはならない状況です。レース参加者への食事も心許ありません。飲料水も」

「まあ、ステキ」

くすくすと、他人事のように紫が嗤って見せた。

「今のところ各参加者の部屋と部屋は廊下で繋げておりますが、通行する際にトラブルが目立ってまいりました。まだ、目立った事件は起きていませんが……」

「そのうちオツパイとかチンとか丸出しにする輩やかいが出そうね」

「あら」

「紫さん、はしたないですよ」

紫が笑って言った。その彼女の言葉にはただ便乗しただけで、本当は別に面白い事があるかのように、二人の少女もいつの間にか嗤い合っていた。

ニタニタ、という形容いづろが相応しいだろうか。泰然と、至極明るく響く笑い声に同調しないのは、部屋の背景として違和感なく溶け込んでいる上海人形だけ。アリスですら、発声は人形に任せていれど唇を吊り上げて酷く愉しげに嗤うのだった。

屹然とした表情の藍だけが、この部屋の中で異質であった。

「レースが開催するまで、アナタや橙だけでも取り仕切れるようにプログラムは組んだはずでしょう？　がっかりさせないで頂戴、藍……今までだって、アナタは相当やってきたでしょう……それとも、妖夢が役に立たないのかしら？」

「いえ。妖夢はよくやってってくれています」

しかし、と心持ち声音を低くし、藍が切言した。

それを受けて紫の目が、細くなって剣呑な光を宿した。

「率直に言わせていただきます　　今からでも遅くはありません、レースを中止すべきです」

言い切つて、藍が、紫色の瞳を射抜くように見据える。

きゆううつと細められたその双眸が、何の感情も浮かばないその両眼が、酷く冷たく自身の式を映した。

「藍……」

「こんな、どうしてこんな事を……紫様！　お考え直してください、あまりにも愚考です！　いくら……」

話していくにつれ感情が昂ぶつたのか尾が逆立っていく。自身の爪が食い込むほどに握り締めた拳は、その顔と同じく蒼白に染まっていた。

「藍」

その、叫ぶような声を制した紫の唇から、ふうつと溜め息が零れ落ちた。床を這ったそれは、断固たる決意を固めたはずの藍の首筋すらをも“ざわっ”と撫で付けた。

「　藍さん、素晴らしいと思いますよ。心配は要らないですとも、その忠誠心を越えた愛のようなお心、きつと」

「シャンハイッ」

飛び上がった上海が、早苗の口を塞ぐ。

きつと藍が早苗を睨みつけるが、上海に口元を押さえられたまま、何処吹く風と言わんばかりにあくまでニコニコと嗤う。

「　　気にしないで」

再び元の“人形”に戻ったアリスが取り成すように、藍に言った。

「……藍………藍」

喉の奥から、臍腑から絞り出すように重々しい紫の声。

「誰一人欠けてはいけないのよ……わかってきているでしょう？　……もう、後戻りなんか、できない」

初めて、その瞳に淡い感情が燈る。

虚空から取り出した一枚の用紙には、『四季映姫・ヤマザナドゥ』

と書かれた、厳格なるレースの審査を依頼する旨が記されていた。

「……もう、二度と、できないの」

握り潰した紙きれを見つめて、紫が言った。

一瞬で燃え上がったそれを、無造作に投げ捨てた。

「えーきさまー」

ノックもなしに、乱暴な仕草で扉が開けられた。

三途の水先案内人、遊情放逸な死神小野塚小町は、顔も上げずに書類と向き合う閻魔の前にずかずかと進むと、再度、「映姫様つてばー」

そこでようやく、煩わしげな表情で地獄の裁判官、四季映姫・ヤマザナドゥは顔を上げた。それでも書類に走らせるペンは休まない。

「何ですか小町。見ての通り私は今とても忙しいのだけれど」

「それは見ればわかりますって」

「なら帰りなさい」

にべもなく言い放つ。

しかし小町の方も、その程度で「はいそうですか」と踵を返すのだった。ここまで来はしない。死神の象徴たる大鎌も今は持たず、映姫様映姫様と連呼してみせた。

「審査長と解説役が遅れてちゃあ話になりませんって。早いとこ出ちゃいましょうよ」

「駄目です」

お互いに全うすべき職務がある以上引き継いでもらう事にもっと謙虚になりなさい小町、ただ代役を立てればそれで済むという問題ではないのですよ小町、それに引き換えなんですか貴方はどうして楽しそうのですか小町、そう、貴方は少しと映姫が腕を止め

て言いかけたところで、小町がどつぞどつぞと新たな書類をさつと走らせる。

あら、と再び映姫がペンを動かすのを見て小町が、「でもですね、映姫様。開会式まで後五時間ぐらいしかありませんよ？ 移動の間もありますし、連中といろいろ打ち合わせとかなきゃいけないよ
うな事も……」

「大丈夫ですよ、心配せずとも」

すっかりいなされた映姫は、気づかないまま、「貴方がいれば移動に時間は掛からないでしょうに。それに、貴方は代わりの船頭を立てればいいけれど、閻魔が仕事を空けるともなるとなかなか煩雑なのです」

「はあ。そんなもんですかね」

頭を掻きながら小町が言う。今言った事と矛盾してるじゃねーかとも思っただが、言わない。

「でもですよ、やっぱりあたいは……」

「本音は？」

「一足先に着いて遊びたい」

臆面もなく言い放たれたその言葉に、映姫は軽い頭痛まで感じた。「あのですね、小町。日頃から思っていたのですが、貴方には是非曲直庁の末席たる自覚が足りないのです。今回貴方に解説の御鉢が回ってきたのだから、単に先の異変の一件で少々顔が知られているから、と向こうから指定してきたからに過ぎないのですよ。もっと気を引き締めなさい」

それに……と、映姫が手元の書類に目をやった。

「下手すると、レースの期間中出歩くことすらもできないかもしれないわ
ないわ」

「ええーっ？」

顔をしかめる小町に対し、裁判長の小柄な体は椅子に埋まるようにして、その書類を一瞥する。寝泊りや食事の類は全てこちらで負担するなど、事細やかに申し出されたその内容だ。

「でも、閻魔たる映姫様を拘束して……」

「ええ。どこか、キナ臭いのです」

二度三度と瞬きをし、映姫が小町を見上げた。

「『距離を操る程度の能力』……小町。もしもの時には、貴方にも働いてもらいますよ」

「はい、わかってますって」

その他の返事を許さない彼女の気迫に、不承不承小町も頷く他なかった。

「あたい、御迎える方は、あんま得意じゃないんですけどねえ」

え……わからないって？

馬鹿ねえ。

記憶だとか歴史だとかを一々黴臭い紙切れ何かに書き記さなくても、時間は案外素直なのよ。いい？ 例えるなら、世界ってのはある種のレースで。

……違うんじゃないかって？

少なくとも私は、これほど悪意が剥き出しに顕わになって他人を蹴落とす“行為”、他にないと思うんだけど……貴方がそう言うんならそうなのかしら。それで結構長生きしてるんでしょう……え？ いやいや、謙遜は結構よ。

まあ、とりあえずそういう事にしておいて頂戴。私は永琳ほど説

明、うまくできないから。

……いいわね？ レース。

要するに、単純なくつかの“ルール”さえあれば、世界つてのは勝手に動き出すものなのよ。何でも、霊夢が世界を物理と心理と運の三層に分けて考えているらしいけど、それだって間違っちゃいないわ。愛憎半ば、ね。

……それが「永遠と須臾」の能力とどう関係するのかって？

ええそいう事よ。だって、レースは一つじゃないんですもの。

『獄中録』 稗田著

ポリポリと小気味いい音を立てるけれど、このセロリとかいう野菜はただそれだけだった。やはりにんじんの方がよい。

屋敷の縁側に寝そべったまま、腹に乗せた子兎の口元へセロリを差し出してみるが、数度匂いを嗅いだ頭をそむけられた。

仕方なく口に再び啣え直し、首を青空へ戻した。

流れていく雲を目で追う。48数えたところで飽きた。

唇で上下に動かしながら、ゆっくりと咀嚼する。手慰みに、丸まった兎の背を撫で付けていた。

まぶたを閉じる。陽光を燦然と受けて、裏側にじんわりと熱を帯びていく。一方、指の間をすり抜ける白い毛並みから伝わるぬくもりは、お日様ほど直接暖めてくれるわけではないが、その分何やら妙に心地よいものがあつた。

溜め息のように、長々と息を吐いた。

最後の晚餐と洒落込むほど伴^{ハテレン}天連気触れを名乗るつもりもないが、一度レースに参加してしまえば、しばらくはこんな平穏とも離れなければならぬだろうし。

てゐが内心でそう独りごちて、目の前にある安寧に身をゆだねようと、粗雑な思考を放棄する。

やがて、二組の安らかな寝息がし始めた。

「てゐー！」

幸運を操る事さえできれば、アイツに口が裂けても言えないような厄運を押し付けてやれるのに。

「どこにいるのー！！！」

屋敷の奥から騒々しい声が近づいてくる。だんまりを決め込んでゐるの耳が思わず震える程度には、耳障りだった。

縁側で存分に日光を貪っていた飛び跳ねる狡兎、因幡てゐは苛立たしげに薄目を開いた。

「てゐーっ！ ちよつと、返事しなさいってばー！！！」

その腹の上で共に午睡に耽っていた子兎も、怯えたように顔を上げる。よしよし、とその耳を撫でてやりながら、てゐが面倒臭そうに上半身を持ち上げた。

見計らったように、そこから見える障子の戸が「ドスン」と乱暴に左右へ引き開けられ、月原産の輝夜のペットが耳と顔を覗かせた。てゐを見咎めるとそのまま走りこむように近づいてきた。

よいしょ、とその場であぐらをかいて足に子兎を乗せたてゐの前に、月の狂気の晴嵐兎、鈴仙・優曇華院・イナバが仁王立つ。

息をする者が三つに対し、兎が三匹。脅威の兎率である。

赤と赤い瞳が見つめあい、どちらとも知れぬ兎耳が揺れる。例え泣き腫らしたとしてもそれとはわからない鈴仙が睨みつけているが、てゐは意に介さない。弛緩したようであり、どこか張り詰めた空気が流れた。

「ねえ、鈴仙」

「何？」

「これ、あんま美味しくないね」

これ、と言つて、唇に挟んだセロリをぶらぶら揺らす。未練がま

しく、未だに半分以上残っていた。

「これ作るぐらいなら、別なものの方がいいよ」

「そうは言っても、それ 師匠の薬の材料に、なるらしいから
まだしばらくはあのままよ、と言っ。

「それより、てあっ」

「やめてよ、鈴仙」

激する彼女を遮ったてゐの声音は、何故か妙に疲れたような響きが浮かんでいた。

「この子が 怖がるから、さ」

「あっ……う、うん……ごめんね？」

ややあつて、気遣うように鈴仙が目線を子兎と揃えて、自分と同じ瞳の色を覗き込んだ。

「新しい畑の耕作賃金は？」

「はっ？」

1200ドルだっけ？ とてゐが子兎を見下ろした。

「ふわああ……」と込み上げるあくびを隠そうともせず大きく耳を立て、思い切り伸びをする。

せっかく畑で作ってるんだから食べなさいよ、と鈴仙がセロリを押し付ける。てゐは子兎の口の中に突っ込んだ。

微妙な沈黙に包まれる。

泣き腫らした後でも前でも、何時だって兎の瞳は赤いのだだけぞ。

おんなじ色だから、私にはわかる。

「れーせんがさ」

沈黙を破ったのはてゐの方だった。

「心配してくれてるのはわかってる わかっているし、嬉しいって、
素直に思ってる」

「なら……っ」

何で。至極簡単なはずのその一言が、続かない。

本当は十分理解しているから。

「永琳は姫様のために、ここを動けない。けれど、あの八雲紫が主催するこのレースには、絶対に私たちの中から一人は詮索する奴がいかなくちやいけなくて　　そうでしょ？」
けれど、頭で理解したからといって、心はどうにもならない。甘く軋んだ叫び声を上げるそれは、本人にすらままならない理性という名の獣だった。狂い咲く炎に自ら身を躍らせて、泡沫の夢と消える。

大切に思っているから。

命こそが最初に手放すべき幻想と知る。

「大丈夫よ、多分。例え何が企まれていようたつて、少なくとも初っ端から見境無く異変は起きないつて。そして私は、あくまでその異変が何なのかを逸早く突き止めればいいんだから。危なくなつたらすぐに逃げるつて」

だから　　笑っていてよ、れーせん。

はっ、と鈴仙が吐いた息の音が、眩し過ぎる青空の中に消えていくように聞こえる。

目を半眼に閉じて小首を傾げると、てゐはもう一度大きくあくびをした。

理性は時に、自身に不快を強いる。
誰しもが皆、理性の獣となる時には。

「……失礼しました」

唇を噛んで、顔を伏せる。燃え滓が散り散りとなって消える様を見つめながら、消え入りそうな声で藍が言った。

「ちよつと待って」

扉に手をかけたところで、何事かと藍が振り返る。

元の茫洋とした表情に戻った紫が、「パチン！」と一回指を鳴らすと、それを受けてか藍の狐耳が帽子の下でピクツと動いた。

「どうやらまあ、予定とはちよつとづつ狂ってきちゃってるようだしね。私の能力、七割程度までは使用出来た方が何かと都合がいいでしょう？」

式とその主人との間でのみ行われる、一時的な能力使用の権限。

よろしいのですか、と藍の目は問いかけていた。

「どうせ、あの子が来るまでは暇なのよ。信頼の証とも思っ頂戴」

「……紫様」

常時その一割に触れていた藍は、レースの準備を任されていた今までもすらも三割ほどだった。

はつきり言っつて、七割もあれば　そしてこの特異な能力ならば　力関係は逆転する。

普通、こんな事はしない。相手の盃の中に自分の酒を注ぐようなものだ。相手が多くなるばかりではなく、自分の中身それも減る。供給を絶とうにも、相手が“対等”にまでなってしまうと、それも難しい。

……紫様、ともう一度、震える声で藍が言った。

「こんなところで、蹴躓いてはられないのよ……わかるでしょう」
藍と、紫の視線が交差する。

紫は、どこまでも無表情　すでに全ての気持ちにけりをつけ、

ただ確固たる意志のみを携えた瞳。

藍には主の真意が計り知れなかった。三途の川幅すらも叩き出す彼女は、覗き込んだそれ以上に底深い紫の檻に囚われるような錯覚をする。

先に折れたのは藍だった。

「……御意に」

両手を袖に突っ込んで、深々と一礼をする。そのまま、足元に開いたスキマに消えていった。

「早苗。さっきのはちよつと酷いと思うわ」

「いえ、そんな。茶化す気なんて微塵もなかったんですよ？」

誤解です誤解ですとのたまう早苗へ、上海人形が宥めるように手を振る。

そう　？　と言って、アリスが今の今まで藍が立っていた場所を見やる。その両眼は、冷たく、理性的な色を映していた。

「　　そういえば」

急に早苗が声を上げた。

「先刻さつきの藍さんを見ていてふと思いついたんですけど　外では昔、日本が第二次世界大戦で敗戦を経験した時に、餓死した裁判官がいたって聞いた事があるんです」

本当に、真実だった今思いついたから口に出した、という風な声音だった。

「何てつたつて戦争ですからね。それも敗戦直後、仮令たとえ裁判官だとしても碌な食料が供給されるはずもなく、大方の人は闇市で糊口を凌いでいたみたいなんです。何でもその人は『法の立場に立つ以上、違法行為に手を出すわけにはいかない』　云々で、結局……」

みたいな人がいたんですって」

流し目で窓を眺めながら、どうでもよさげに「ふーん」と紫が言った。

逆に、「へーえ。何か、いいわね、そういうの」と反応を示したのはアリス（人形）の方だった。

糸繰り人形がその手を休め、アリスが早苗に顔を向ける。人差し指だけをついつと僅かに動かして、人形に代弁させる。

「興味深いわ、それ」

「そ、そうですか？」

食い入るようなアリスに対し、逆に、話した当の本人である早苗はあまり声に力がない。

「馬鹿な事じゃあ、ないんですかね」

「馬鹿と一口に言い切るのは簡単よ。でも、一々そんな調子であれば無駄これも無駄って切り捨てていくようじゃ、魔法使いなんてやめた方がいいわ」

赤、下賤な色。橙、媚びた色。黄、幼稚な色。緑、呆けた色。青、卑屈な色。藍、愚劣な色。紫、狡猾な色。

そういった色眼鏡を通しては、駄目だという事か。

「そういうものでしょうか」

魔理沙あたりならともかく、種族からして魔法使いである彼女が力説するならば、そう……なのだろうか。

「自分の意志を貫徹して、逝く。人生に一本筋の入った、いい死に様じゃないの。日本人はその辺うるさいんでしょう？ ハラキリハラキリって」

「腹切りって」

いつの時代の話だ。

確かに彼女の言葉も、無下にするにはやや躊躇われる。まあ少なくとも、そういう見方だってできるだろうとは、思う。

だが、早苗は生まれも育ちも現代社会。武家屋敷にはあんまり興味もなく。家の一族の宗家には鹿威ししおどすらあったが。アイスを

頬張りながらアニメを観て、携帯を片手に登校するような現代っ子なのだ。

「“違うの？”」

「違い……ますよ」

だって。

もつと。

現実には、もつと穢きたないはずだ。

街を歩けば皆、誰も彼もが他人に無関心で、ただ気だるそうに歩いていて。歩き煙草を咎める者なんていないし、危ないよ、と声をかけてくるような人もいない。ゴミ箱に投げ入れたけど、落ちた。知らん振り。

生き汚い。

お年寄りには率先して席を譲ってやるべきではないのか。校則は、守らなければならぬのではないか。私が特別、偉いわけではないのに。

偉いだなんて……虫唾が走る。

自分を表せずにはただ唯々諾々と社会に迎合していればいい、なんて。私には理解ができない。

それでも、大人はそうであれと言いつけるのだから。多分、彼らもそれしか言われなかったからだ。没個性を磨きましよう。なんて。

生き穢い。

爪の間に泥が入り込む。泥が混じり込んだ水溜り。髪が汚れてしまう。ああ、母が、母が『可愛いわ』と言ってくれて、朝、不意に、眩暈がした。

『……………カミサマ？』

『あいつ』

『かみ……………力……………』

『俺らって』

『カミサマ』
『ねえそれって』

『神様?』

色眼鏡。

「……何の話をしていたんですたっけ」

「さあ。実はよく、わかってなかったりしてね」

「もう、アリスさんってば」

「ねえ、早苗」

私は『東風谷』なのだから。修行とか、祈祷とか。私は。

……“私”?

そういえば、あの時何で彼女はあんな目を。

「そういえば、早苗は何で紫に手を貸しているんだっけ? それも、神様方には内緒で」

珍しいじゃない と、アリスは指を動かした。

「珍しい ですかね」

口に出して反芻してみると、確かに……珍しい、ような。でも。

「諏訪子様や神奈子様だって、私に内緒でいろいろ企んでおられたんですから」

ずるい。

「お二人が内緒でこそこそやるんだったら、私がやったっていいじゃないですか」

「ふーん。それだけ?」

「そ

それだけの はずだ。

魔法使いとやらの共通性質か、いつぞやの異変の時の魔理沙のよ
うな残酷で真つ直ぐな目。つい、と糸を繰る指が動かされた。

「本当にそれだけなの？ ううん、何か腑に落ちない」

「そんな事言われても」

彼女が中途半端に言葉を濁すものだから、こちらまで言葉が続か
なくなる。

「それだけですよう、もう」

「……そう？」

「ごめんなさいね、と言って、アリスが目線を戻した。

再び、藍が『溶けた』床を見つめる人形のような横顔は、相変わ
らず、何を考えているのか早苗には想像できなかった。

この世に不変なんてものはありませぬが、不愉快な感情は何
時だつて私の傍で産声を上げております。

貴女のその怪異たる鋏シザーハンドの隻手。そう、愛する者さえ切り裂く恐怖
の異端。

ああ、勿体のう御座います。

卑しき雌狐めに邪魔さえされていなければ、疾う疾う、犯して死
なせてご覧じますのに。

珍しく輝夜が真面目な表情で切り出すから、一体何だ、またぞろ月に帰るのか　と冗談交じりに聞いた結果が、これだ。

『レース』。そう聞いている。

出場してくれと言われて、手始めに顔を殴り飛ばしたのは記憶に新しい。

そのままいつものように殺し合いに発展してなお、私、藤原妹紅が、実際に今こうして選手控え“空間”を歩いているのは、まあ…一時のきまぐれというやつだろう。

毎度毎度、こうして殺しあうのもいいけれど……たまには、手を組んでみない？

よく……わからない。

そう言った。

それでもいいわ。手回しはこっちしておくから、アナタは実際に動いてもらいたい。

だから何をだ、と聞き返し、一通りあらましを把握したところで、遅時きながらもそこでようやくと、どうやらキナ臭い事になっていると知った。

ふーんと、我ながら淡泊な声が出て、それから「レース、ね」と呟いた。

『ええそうよ、レース』

『肝試しの時の八雲が、ねえ……。今度は何だ、全国行脚か』

『むしろ飛ぶんじゃないかしらね』

『そうなのか？』

『知らない』

そう、私たちは今のところ、圧倒的に情報が足りない。

だから、私に出て欲しい……だったか。

低く、小さく口笛を鳴らした。

両の手をモンペの衣い囊うぶに突っ込んで歩くこの“空間”は、目を凝らしても壁と床と天井の境目がよくわからない。全てがただ紫色に蠢うごめいている。実に主催者らしい内装だ。踏み締める靴の裏からも、何やらぐにぐにと生理的に嫌な感触が返ってくる。それでも、移動経路がこれしかないのだから、我慢するしかないのだけれど。

出場するそれぞれは、レース開催まで用意された個室で過ごす。一般的な和室だったが、入り口はドアとかいうやつだった。部屋ごとに識別するための数字が振られており、私は『ふ 136』だ。四尺（一尺が約三十センチにあたる）ほど間隔を開けた隣部屋が『い 3000』なのだから、わけがわからない。

そもそも、廊下の見通しがつかないところからしておかしいと思う。

等間隔の部屋が、前後に五つ程度。私が移動していても常にそれぐらいの範囲しか見えず、そこから先は紫色にもやもやと霞がかかったようになっていた。

要は、知られたくない何かがあるという事 なんだらうか。じつと部屋で考え事をする、という性質でない私はただ、ぷらぷらと廊下を理由も目的もなく進んでいた。

他にも調査役はいるらしいが、名前は聞いていない。鈴仙だらうか。

ぼんやりとした思考の中、緑色の妖怪とすれ違った。これから始まるのにどこへ行くのだらうか。

そういえば、未だ人間の参加者を見かけない。ほとんど妖怪……まあ、それも当然か。

何しろ、ゴールも不明、詳しいルールも不明、どこるか開催地すらも当日まで伏せられている有様だ（そのせいで、雑多な憶測がそこかしこで飛び交っている。閻魔がわざわざ審査を買って出たのも、裏で手を組んでいて終着地点は地獄なんだという笑えない冗談まで

出る始末)。

皆、ただ優勝特典に血眼になっていて。

「おい！どこに目えつけて歩いてんだっ」

どん、という軽い衝撃。上げかけた足が止まる。

目線の下から、口汚く、甲高い声がした。

出会い頭、まだ名前も知らぬ相手からいきなり随分な挨拶を賜わるというのは、永く生きてきたがなかなか珍しい。

視線の先には、どこぞの泥棒魔法使いより少し赤みがかった金髪を、側頭部で数本の三つ編みに編んでいる少女^{ガキ}。

見上げてきたのは青緑色。濁った沢を彷彿とさせる、妙に 不純な瞳。

そこに映りこむ私も、何だか汚らしかった。

「おいっ……おいっば。ボケっとしてんじゃねーぞ」

「はあ？」

口から、額面どおりに気が抜けた。

小憎たらしいセリフをぺらぺらと捲くし立てる口と、それに追隨して光る勝気な目。この場にいる、という事はレースの参加者

なんだろうが、言動から鑑みるに“彼女”はあまりにも。

「あんた」

相手を無視して手首を掴む。少女の目が見開かれた。

「もしかして」

思い切り首をのけぞらせ、ぎりぎりのところで回避した。

それがかすった喉の端から血が滲む。無意識のうちに傷口へ指を走らせると、ざらついたような感じがした。

「人間だな？」

傷を抑える五指に纏めて炎を滾らせ、浄化と血の処理をする。

感情の抜け落ちた表情で少女がそれを見て、ふん、と鼻を鳴らした。

「そついうテーマは、妖怪じゃねーか」

人差し指と中指を揃えて伸ばした、奇妙な姿勢のまま低い声で、

「いいか、次に私に触ったら、その細え首切り落とすぞ」

「おいおい……」

調子確かめるようにごきごきと首を鳴らして、妹紅が「先に一
つ言っておくけど、私は人間よ」

「あ、そ。つまねえ冗談だな。そんな事どうしたら信じられんだ
？」

「……私からしたら、そつちこそ冗談」

目の前の少女からは、靈気も妖気の類も感じ取れない。なのに、
一瞬で私の喉を切り裂いたあれは。

見下ろす彼女は年相応に脆弱で、あつという間に潰れてしまいそ
うだった。

この、碌に精気も見えないくせに、ぎらぎらと輝いている瞳。
どこかで、見た事が。

沼の臭いがした。

「人間」

言葉の響きを確かめるようにそつと妹紅が、「……人間」と呟い
た。

「ならその右腕は何なんだ？」

雑多な深緑が浮かび上がる、息潜めるものを覆い隠す古沼。

少女の指先から肘の中ほどまでが黒く変貌していた。貝や蟹のよ
うなぬらぬらと光るキチン質の甲殻プロテクター。五対の鋏脚のような指は、皮
や肉ぐらい余裕で切り裂いてしまえそうだった。

濁った沼沢で鋏を磨ぎ、息を殺して水面へ手を出す愚か者を
ただ待ち続ける、臭い。

「……ふん」

甲殻を軋ませながら、少女が妹紅に凶器ゆびを向けた。自虐ともとれ
る色がその目に浮かぶ。

「妙な関心は持つんじゃないぞ。喻たとえテメエがちよつとしたおせっ
かいであるとな、ただそれだけだ。くだらねえ。私の方には興味
もないし理由もない」

すつと、その腕の黒々しさが引いた。

「切り落とすぞ」

威圧的に一言言い放って、そのまま通路を歩いて行ってしまった。空間の端へ少女が紛れると、後には慥然とした表情の妹紅だけが残った。

「……薄気味悪い」

ぼそつと毒づく。

執念に燃える瞳。

苛立ちに包まれた妹紅には、先程抱いた印象は既に欠片も残っていないかった。

彼女の目が、かつての自分と同じ色をしていたことなど。

八雲紫は考える。

出場選手らからぼちぼち漏れ聞こえるようになってきたレースの詳細なルール説明の直前にも、彼女はしつこい天狗の取材に笑顔を浮べて応じていた。

「ですから、自ずと物理的に限界は生じるでしょう。今の幻想郷には、人間、妖怪、魔法使い、妖怪、吸血鬼、亡霊、天狗、河童、仙人、鬼、神……様々なものたちがいる。中にはかつての栄華を忘れられず、燻る輩も多いでしょう……要は、手狭になってきたという事ですわ」

さほど広い部屋ではない。白を基調にした背景に、用途が推測できない品々が壁際に寄せられている。埃の積もったフォノグラフ、付喪神にも化けられそうな幻燈機。空である事が一目でわかるガラス箱には青竹が数本立て掛けられていた。

幻想郷全土を精密に網羅した地図が壁一面にかけられ、八雲紫はその前の椅子に腰掛けていた。

此岸彼岸何てものがこの世の理の範疇「こゝろわり」にないならば。生きていては、心を持っていては、手に触れもしないなら……。

対するのは十数名ほどの天狗たちだった。皆一様に手に持った筆を走らせ、時折質問を放つ。他には若干名の河童がカメラを覗き込んでいた。

「後ろの地図は現在の幻想郷の縮小図ですが、この度のレースでは一切関係がありません……出場者には相応のルートを用意しております」

彼女の言葉に場がざわついた。困惑した表情で隣通し目を交し合うが、そこは天狗、すぐさま前列の何人かが身を乗り出す。

「レースの道のりは約6000キロと聞きましたが？ 一体どのよ

うなレースを描いておられるのですか？」

「その質問は公平性を期すためお答えできませんね」

「つまり、舞台は幻想郷ではないと？」

「いえ、『外』と申してるわけではありません」

「具体的な事な話せない、と。では、何故種族による参加が制限されていないのですか？ 明らかにルール上有利不利が発生する事が想定されますが」

「そうは思いません。先程も申したとおり、このレースはアンデントイテイーに『挑戦』があります。歩く妖怪もいれば、飛べる人間だっていますわ。昼や夜、種族としての地力、積み重ねた歴史、そして自分自身の力を振り絞った先にこそ、我々が久しく忘れていた『闘争』、そして『誇り』が垣間見えるでしょう。スペルカードの使用を認めているのもそのためです」

「いざこざの処理は自分たちで、という事ですか？」

「そうなります。……ああ、私共の方ではその結果についてまでは面倒を見切れませんが、ご了承くださいね」

「我々天狗の中からも既に参加を表明した者がいますが。あくまで参加者全体を見て、ゴールまでの日数はどのくらいとお見積もりですか？」

「なんにしる前例のない事ですから……我々も、差は埋められるものと考えております。とはいえ、ご同胞方は他の参加者よりも優位であるというのは妥当でしょう」

「我々大柁新聞では、レースに先んじてファーストチェックポイントの勝者に対する予想を紙面で募る予定です。博打は好きですか？」

「ありがとうございます、私も後日一口乗らせてもらいましょうか」

「主催者側はこれを“異変”ではないとお考えでしょうか、“博麗”はどうですか？」

「今代の巫女とは既に会見を終えていますわ。大変好意的な返答を頂きましたの……ゆえに、他の方からもご賛同は得ていると考えて

おります」

途切れる事なく発せられる質問に一つ一つ回答をしていく妖怪の賢者。

レースは、まだ遠かった。

「バナナはおやつに入るんでしょうか」

「是非曲直庁の到着後、判断を仰ぎます。この度をもって深遠なる命題とされてきたこの問いの是非を決定されます四季様のご協力に感謝を」

「中継は」

「万全を期しておりますわ。皆様方も同様です、ご安心ください」

「種族や個体差 『一回休むだけ』の妖精や距離を縮められる能力の使用に関しては」

「認めます」

「太陽が出てると厳しいの」

「お嬢様、もう帰りますよ」

「各チエックポイントで選手は次の区間の準備に取り組むという事ですが、レース中の食料などもそこで？」

「そうなります。自給自足が為せるなら荷を軽くすればレースには有利でしょう。ですが不慮の自体にも気を怠るのはお薦めしかねますね」

「優勝特典につきまして、これは」

「……ああ、花果子念報の方ですね。お読みになった通りだと思い

ますよ……そう、「優勝者は、一つだけ、願いを叶える」と

「ですが」

「仰りたい事はわかります 全てはレースの中に、ね」

見えない倫理。

そんなもの、必要はないわ。

「結局のところ、この『物語』に“成長”なんて、美しいものを求めてはいけないのかしらね」

「肉体が………という意味ではなく、青春から大人という意味でもなく………」

「あら？ 私の名前？」

「そうねえ……まあ、そんなのはどうでもいい事でしょう？ 案外、もう検討がついていたりしてそうだし、ね」

「むしろ、当てて御覧なさい、と言わせてもらいますわ」

「……いえいえ。私ではなく 主人公を」

「最初から最後まで、終始一貫、見事に曖昧で、全てに意味なんてものがないこの物語のを、ね」

「死なない罪人と、傲慢な魂とが」

「地底から這い出た嫉妬心も、悲哀に濡れる一本杉も」

「想いと幸運を等分に背負って。軋んだ理を高々と掲げて」

「あら……こうしてみると、そもそも成長何て無縁な者ばかりですわね」

「まあいいでしょう」

「極端な二元論に従って、“私”とそうでないものに分けた時。

全てを剥ぎ取られてしまった脆い純粋な“私”は 果たして」

「本当に私と言えるのでしょうか……なんて、くだらない戯言が、あるいはファンファーレとして相應しいのかも。フーフー吹くなら
ってやつね」

「成長などと呼べるものではなくて 知ってます？ 蝶のさ
なぎ、あれって一旦ドロドロに中身を溶かして変えてるらしいんですの」

「傷んだ躰を引き摺って、それでも欲望が足を歩めるならば、ああも醜くなりもするでしょうけど」

「私は、御免だわ」

「これは、だから 愚図」

「自らが踊っている事に気づかず、足を踏み外そうともせず、そして停滞さえもできない、愚図たちの本物と抽象」

「もちろん、私も含めて、ね」

「もしも、この挑戦を勝ち抜く自信が
ありなら、是非とも考えて
いて貰いたいわ」

「 望みが一つだけ叶うなら、あなたは何を望むのか 」

(後書き)

スタイル・ボール・ラン完結記念短編です。

ピクシブにて、祢々様の『スタイル・ボール・藍』という作品を
拝見した際にふつと構想が浮かびました。多謝。

・キーワード

『かぐや可愛い』

『愛されパルスィ』 ここ重要。 上も重要。

最初は藍様が紫に命じられてレースに参加ーみたいな感じで考えた
のですが、多分こつちの方がらしい。短編だと何の意味もない変更
なんです。

「東方鎮魂歌」及び「東方悪食歌」が連載終了したら書こうと思
います。要は永遠に続かない。

設定はわりと練り込んだ方ですが、いかんせん「レース」をどう消
化したらいいか皆目見当もつかず。

その内表現できるだけの文章力もつくだろう、と無責任に思ったの
でした、ちえんちえん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0494u/>

スティール・ボール・藍

2011年7月20日03時13分発行